

提出日：令和 3年 3月 4日
所 属：獣医学部 動物応用科学科
氏 名：茂木 一孝 職位：教授
役 職：専門共通教育系主任

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

担当している授業・実習科目では、動物の示す行動を司る神経系などのメカニズムを学ぶとともに、行動の背景にある動物の心についても考察してゆく。人間社会において動物の行動や心という視点から諸問題を解決できる人材を育成する責任がある。

科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
動物行動神経科学	動物応用科学科	必	2	128
動物行動治療学	動物応用科学科	選	3	37
専門ゼミ	動物応用科学科	必	4	9
応用動物心理学実習	動物応用科学科	選	3	29
動物発達行動学実習	動物応用科学科	選	4	13

2. 教育の理念（育てたい学生像, あり方, 信念）

動物の心という視点を持つことで、現在社会における動物に関連した諸問題で見いだせる解決方法があるかもしれない。また今後の動物との共生社会においても、この視点を持つことで、動物の新たな活用方法を見いだすなどの豊かな共生社会が創造できると考えている。担当している授業・実習科目で動物の心を学んだ経験をもとに、現在の動物に関連した諸問題の解決、新しい共生社会の創造に貢献する人材を育成したい。そのためには、単に知識のみを覚えさせるといった教育ではなく、学んだ知識をもとに、社会における諸問題にこれまでと異なる視点から取り組むことができ、新たな課題を見出せる人材を育成する教育をしたい。また、実際に社会で活躍するためには、今後ますます共同作業が重要になると考えている。目標達成のために、他者と柔軟に協力し、自身の役割を全うできる人材を育成したい。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方, 方法）

学んだ知識をもとに、社会や職場での諸問題にこれまでと異なる視点から取り組めたり、新たな課題を見出せる人材を育成するためには、例えば現在考えられている動物の行動メカニズムの知識のみを教授するだけでなく、そのメカニズムがどのような疑問をもとに、どのように追求されてきたかのプロセスを理解させるような教育が重要だと考えている。なぜなら、様々な問題の解決や新たな課題を見出すためにそもそも一番重要なことは、様々な問題や観察される現象に対してどのような疑問を設定するか、だからである。疑問を持つことで考える道筋ができ、これまでにないような疑問からは独創的な解がうまれる。知識を教授するような講義においても、その知識が見出されてきたプロセスも解説することで、その知識の背景にあるそもそもの疑問がどのような視点からのものなのか、また疑問をもつことが如何に重要かということを理解させるようにしている。実習においても、担当実習では実際に犬を扱い、行動を観察してより家庭犬に相応しい行動をするようにトレーニングをする場面などがあるが、まずはその犬がなぜその場面でそのような行動をするのかといった疑問や、何がその犬をトレーニングするに相応しい課題なのかを学生自身が生み出せるように対話を通じて誘導するようにしている。学生自身の疑問から設定した課題を解決する、という体験をさせるようにしている。

また卒業後の社会で目標を達成させる重要な力の一つは、目標に向かって共同作業できる能力だと考えているが、そのために主に実習ではグループワークによって課題解決に取り組ませている。グループでどの目標に取り組むかを議論した後、達成のための計画を立案させ、定期的なミーティングで方向性の確認や修正をさせながら、目標達成まで対話を通して指導している。

アクティブラーニングについての取組

動物行動治療学、応用動物心理学実習、動物発達行動学実習ではグループワークおよびプレゼンテーションを実施している。専門ゼミではこれに加えて、調査学習および対話・議論型授業を実施している。

ICTの教育への活用

コロナ禍の影響からオンライン講義を実施している。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

①教育（授業、実習）の創意工夫（A）

②学生の理解度の把握（A）

③学生の自学自習を促すための工夫（B）

④学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（A）

⑤双方向授業への工夫（C）

※A（十分実施している） B（実施しているが十分でない） C（うまく取り組めていない）

上記を鑑みて現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。

動物行動神経科学はこれまで3年次の選択授業であったが、カリキュラムへの変更で今年度後期から2年次必修へと変更になった。また、コロナ禍の影響でオンライン授業になったこともあり、これまでより更に理解しやすいような授業実施を心掛けた。私の担当授業では知識が見出されてきたプロセスを理解させることも重要な目標としているため、実際の動物実験の紹介や論文のグラフを多用している。2年次ではまだそのようなグラフの見方などに慣れていないことを考慮し、グラフの説明は軸の説明から詳細にするなど、これまでよりも説明を丁寧に実施した。また話しが理解しやすいように、授業の流れもロジックをより意識し、細かな部分も修正してスライドを組み直した。オンデマンドでの実施にしたが、そのためにどう話すかは十分に吟味でき、また話すスピードが速くならないように、間の取り方も意識した。授業評価のアンケート欄では、音声聞きやすかった、また話しがわかりやすかったとのコメントがみられ、この点は成功したと考えられる。授業後1週間以内での小テストによって復習する機会は与えたが、予習をさせる取り組みは不十分であった。オンデマンド教材でどのように双方向授業に取り組むかは課題として残された。

応用動物心理学実習は、今年度はコロナ禍の影響でこれまで通りの内容、つまり保護犬を学内に導入して各犬を履修者がグループで管理しながら、それぞれの犬に必要な課題をグループで議論しながら家庭犬としてのトレーニングを進めてゆく、という内容は実施できなかった。代替案として、トレーニングの基礎的解説はオンデマンドで実施し、週1度家庭犬をお借りしてきてトレーニングの実践をした。これまでの実習コンセプトをできる限り踏襲できるように、各犬の特徴の把握やどうトレーニングをするかはグループワークで実施し、対話を基礎とした実習を実施した。

5.学生授業評価

①授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

昨年度の授業では『この授業の予習・復習を週当たりどの位行いましたか』のスコアが学部平均よりも低かったが、今年度は課題や小テストをすることで復習はさせるように手配した。

② ①の結果はどうか。

授業評価では改善は認められなかった。

③ ②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。

授業後に小テストをするにしても、実施した授業をもとに、ある程度の調べものなどをしないと答えられないようなもの設問にすることを考えている。

6. 学生の学修成果

① 学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

学生の成績を向上させるためには、まずは何より学生自身が学ぶ姿勢となることが必須であり、そうしなければ何をやっても効果は小さいのではと考えている。そのためには、学生がその学問を面白がるかが鍵ではないだろうか。これまでも、動物の行動実験の実際の動画を視聴させたりするなど、なんとか興味をもってもらおう努力はしているが、学生が本当に面白がるためには、より多い実体験が必要なのではと考えている。

②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

大学院生が筆頭著者として国際学会誌に論文を発表した<Developmental Psychobiology 63(1):108-113, 2021 Jan>。

7. 指導力向上のための取組 (FD 研究会参加状況)

麻布大学の遠隔式授業に対する取組に関する研究会や付属高校教員との保護者対応力に関する合同研修会などに参加した。

8. 今後の目標 (理念の実現に向かう今後のマイルストーン)

短期的な目標としては、オンデマンド教材を利用しながら、課題やディスカッションで効果的な双方向のやり取りをする自分なりの方法論を編み出したい。また長期的な目標としては、動物応用科学科の学生の学力の幅の大きさに対してどのように対応するかの方策を見出したい。授業のレベルを落とすことなく、学力の低い学生にも学問に興味をいだかせ、如何に授業に取り込むかの具体策が必要だと考えている。

9. 添付資料 (根拠資料) (※) 資料名のみ

授業評価アンケート